

カースン・マッカラーズの『結婚式のメンバー』について

石川和代

On Carson McCullers' *The Member of the Wedding*

Kazuyo ISHIKAWA

I

Carson McCullers は、23才の時に *The Heart is a Lonely Hunter* (1941) を発表し、その才女ぶりがアメリカ文壇を驚かせた作家である。彼女のすべての作品に共通している最大の主題は、人間の精神的孤独と、その孤独から逃れようとして求める愛であるが、*The Member of the Wedding* (1946) の場合は、子供から大人になろうとする12才の少女の、思春期の精神的孤独とその不安な心の成長過程を描いている。登場人物は、主として三人、すなわち12才の Frankie Adams, 7才のいとこ John Henry, 黒人の女中 Berenice であり、作品の舞台は大部分が Adams 家の台所で、作品の大部分が、3人の会話と Frankie の内的独白から成り立っている。作品全体が3部に分かれ、各部において主人公の名前が Frankie, F. Jasmine, Frances と変化し、それが主人公の内的変化に呼応している。作品で扱われているのは、主として、Frankie の兄が結婚式を前にして花嫁と共にやって来た金曜日から結婚式当日の日曜日の3日間である。これらの点からわかるように、この作品はその構成が、統一のとれた、まとまりのよい作品であり、Lawrence Graver も “*The Member of the Wedding is Mrs. McCullers' best book because it remains complete in itself—a small but undeniably affecting story of adolescent joy and frustration.*”¹ と述べている。この小論においては、この作品の中心となっている主人公 Frankie の思春期の精神的孤独に目を向け、彼女の不安な心が揺れ動きながら一步成長する過程について考察してみたいと思う。

II

物語の第1部の冒頭の一節は Frankie の孤独な状態を次のように描写している：

It happened that green and crazy summer when Frankie was twelve years old. This was the summer when for a long time she had not been a member. She belonged to no club and was a member of nothing in the world. Frankie had become an unjoined person who hung around in doorways, and she was afraid.

12才の Frankie は、いかなるクラブのメンバーでもなく、世界のどこのメンバーでもなかったとあるが、彼女はこの時、本当にどこにも属することができない状況である。彼女は男の子だったら海兵隊員として戦争に参加できるのだが、それは無理なので赤十字に献血しようと決める。だが若すぎるという理由で申し出は受け入れられず、彼女は自分が世の中から切り離されているように感じる。彼女はまだ大人の世界に入ることはできないのである。また、それまでは父

親と一緒に寝ていた Frankie であったが、子供としては大きくなり過ぎたため、父親から、“Who is this great big long-legged twelve-year-old blunderbuss who still wants to sleep with her old Papa.”(p. 32)と言われるようになり、子供の世界にもいられなくなる。年上の女の子たちが入っているクラブには、若すぎるという理由で入れてもらえないし、母親が死に、父親は仕事に忙しく、兄は兵隊となって遠いアラスカにいるといった具合で、彼女が属すべき家庭らしきものもない。この狂ったような夏に Frankie と共に台所にすわって話す仲間は、黒人の女中の Berenice と、いとこの John Henry だけであり、それは彼女にとって最も望まない仲間なのである。

この夏、Frankie の悩みごとは属すべき所がない孤独な気持だけではない。この夏までに彼女は1年で4インチも背が伸びたため、そのまま伸びたら、18才の誕生日で成長が止まったとしても、いまに9フィートを越えることになると考え、9フィートを越えた女の人ってどうなるのか、まるで奇形ではないのかと心配になるのである。Frankie が自分が奇形になるのではないかと心配する気持は、町の広場へやって来たチャタフーチ博覧興行の奇形の見世物小屋へ、John Henry と一緒に行った時、“She was afraid of all the Freaks, for it seemed to her that they had looked at her in a secret way and tried to connect their eyes with hers, as though to say: we know you.”(p. 27)であったことにも表われている。属す所がない孤独な状況と、自分の背が伸びすぎて奇形になるかもしれないという心配から、Frankie は、自分自身が Frankie であることがたまらなくいやで、自分自身が憎らしくなり、“I wish I was somebody else except me.”(p. 12)と言うのである。

この年の春には Frankie の内面に変化が起こり始め、彼女は理由もなく悲しくなり、その悲しさのために、町を去らねばならないことを知る：

She did not know why she was sad, but because of this peculiar sadness, she began to realize she ought to leave the town. She read the war news and thought about the world and packed her suitcase to go away; but she did not know where she should go. (p. 30)

彼女は世の中のことを考えるようになり、出発の準備をするが、どこへ行くべきかはわからないのである。世の中のことを知ろうと新聞で戦争のニュースを読み、男の子だったら海兵隊員として戦争に参加できるが、それは無理なので赤十字に献血を申し出る。彼女が献血をしようと決めるのは、自分の血が世界中に行きわたり、世界中の人々となつなかりができるからである。若すぎるという理由で申し出が受け入れられないと、彼女は赤十字に腹を立て、戦争も、世界も、早すぎて、大きすぎて、異様であると考え。この彼女の気持は、世界のことを“huge and cracked and loose and turning a thousand miles an hour.”(p. 30)であると考えた彼女の世界観にも表われている。献血を断われたことで、Frankie はすべてのものからとり残されたような不安を感じ、自分が世の中から切り離されているように思う。自分が属すべき所がないという孤独感は、自分が誰なのかというアイデンティティーの問題につながっていく。早朝、Frankie が庭に出て、夜明けの空を見上げながら、長い間立っていると、疑問がわいてきて不安になるのである：

She was afraid of these things that made her suddenly wonder who she was, and what she was going to be in the world, and why she was standing at that minute, seeing a light, or listening. or staring up into the sky: alone. She was afraid, and there was a queer tightness in her chest. (p. 32)

こういった不安定な気持の Frankie にとっては、すべてがおもしろくなく、彼女はいろんなこ

とをしないで、面倒を起こす。父親のタンスの引き出しからピストルを取り出し、町中を持って回り、空地で撃ちまくったり、シアーズ・アンド・ローバック商会から万能ナイフを盗み出したり、Mackean 家のガレージで、Barney Mackean と奇妙な罪を犯したりといった具合である。親友の Evelyn Owen がフロリダへ引越してしまうと、Frankie は同じ年代の誰とも遊ばなくなり、町を去りたい気持が強くなるが、どこへ行ったらいいのか、どうやって一人で行ったらいいのか見当もつかず、仕方なく家にいて、暑い夏の日々を、Berenice と John Henry と彼女の三人で過ごすのである。この三人が台所で過ごす生活はきわめて単調で退屈なものであり、それは、“The three of them sat at the kitchen table, saying the same things over and over, so that by August the words began to rhyme with each other and sound strange. The world seemed to die each afternoon and nothing moved any longer.” (p. 7) の描写によく表われている。

所属すべき所のない孤独感、自分が奇形になるかもしれないという不安感、自分のアイデンティティーの不確かさに悩みながら、世の中へ出て行くにも方法がわからず、仕方なく家で単調な日々を過ごしている Frankie にとって、兄の結婚と、自分も出席することになった結婚式は、非常に新鮮で心が浮き浮きする出来事である。日曜日に結婚する予定の兄 Jarvis が、花嫁の Janice をつれて、金曜日に Frankie の家にやって来ると、それまでは “a person who had never thought about a wedding” (p. 22) であった Frankie は、兄と花嫁の姿を見て、名づけようのない感情がわきあがってくるのを感じる。そして、結婚式のことを Frankie の心の中の大きな部分を占めるようになり、夏の単調で退屈な生活の中で、結婚式だけが、“bright and beautiful as snow” (p. 23) なものとして、彼女の心を引きつけるのであるが、これは、12才という思春期の Frankie にとって、きわめて自然なことと言えるかもしれない。自分が9フィートを越える奇形になるかもしれないという不安を抱いている Frankie は、Berenice に向かって、“I doubt if they ever get married or go to a wedding... Those Freaks.” (p. 27) と、奇形の見世物小屋で見た奇形たちのことをたずねたり、“Do you think I will grow into a Freak?” (p. 28) と言ってみたり、そんなことはないと言われると、“Well, do you think I will be pretty?” (p. 28) と聞いてみるなどして、結婚や結婚式と自分を結びつけて考える時に生じる不安な気持を見せるのである。また、Berenice の結婚についてたずねる場面では、小柄な Berenice が13才で結婚したことを知ると、“Does marrying really stop your growth?” (p. 36) とたずね、Berenice は “It certainly do,” (p. 36) と答える。この Berenice の答えが、より一層、Frankie の心を結婚のほうへ向けさせることになるとも言える。

結婚及び結婚式に心を引かれる Frankie は、兄と花嫁が帰って行った後、取り残された寂しさを感じる：

Frankie closed her eyes, and, though she did not see them as a picture, she could feel them leaving her....But a part of her was with them, and, she could feel this part of her own self going away, and farther away; farther and farther away, so that a drawn-out sickness came in her, going away and farther away, so that the kitchen Frankie was an old hull left there at the table. (p. 38)

ちょうどこんな時に、Frankie のかわいがっていたペルシャ猫の Charles がいなくなってしまう、彼女は “It looks to me like everything has just walked off and left me.” (p. 40) と思い、ますます孤独な気持が強まってくる。兄と花嫁が結婚式をあげる町の名前が Winter Hill であることから、Frankie はこれが北部の町だと思い込み、美しい冬の雪景色と結びつけて考えるようになり、彼女の心はますます結婚式に引きつけられていく。“They went away and left me with this feel-

ing.” (p. 44) という Frankie の言葉にも表われているように、兄たちに置き去りにされたという彼女の気持は強まり、ついには “I won’t be living in this one much longer. I’m going to run away from home.” (p. 45) と言い出す。そして突然、彼女は自分でもそんなことを言おうとは思えもしないうちに、 “I’m going to Winter Hill. I’m going to the wedding. And I swear to Jesus by my two eyes I’m never coming back here any more.” (p. 46) という言葉を口にするのである。世の中へ出て行こうと思いつけている Frankie が、自分が Frankie であることがいやで自分自身を憎らしく思っていること、台所での三人の退屈な生活に飽きていること、そして、南部に住んでいる彼女が、Winter Hill を北部の町と思いつ込んで心引かれることなどを合わせて考えるならば、Ihab Hassan の、 “... Frankie is first of all animated by the desire to escape: escape boredom, escape her adolescent self, escape the South itself.”³⁾ という意見は、的を得たものであると言える。Frankie の心に、ある考えが浮かぶのは、夕暮れの町を John Henry と歩いている時のことである。兄たち二人は Winter Hill へ行ってしまっただけで、自分だけが取り残され、二人から切り離されてしまっているという悲しい気持でむかむかしている時に、 “*They are the we of me.*” (p. 52) という考えがふと頭に浮かび、彼女には納得がいく。それまで、他の人たちには「わたしたち」と呼べるものがあっても、Frankie にはなかったのだが、彼女は、兄と花嫁の二人が自分にとっての「わたしたち」であり、それ故に、二人に置いて行かれて自分だけ取り残されたことが奇妙に思われるのだと考える：

There was her brother and bride, and it was as though when first she saw them something she had known inside of her: *They are the we of me.* And that was why it made her feel so queer, for them to be away in Winter Hill while she was left all by herself; the hull of the old Frankie left there in the town alone. (p. 53)

この考えが浮かんでからしばらくして、John Henry から、町を出てどこへ行くのかと聞かれた Frankie に、新しい感情がわいてくる。それは、自分には心の底でどこへ行くのかちゃんとわかっているという気持である：“The sudden feeling was that she knew deep in her where she would go. She knew, and in another minute the name of the place would come to her.” (p. 56) 次の瞬間には、Frankie は自分が誰であるか、どうやって世の中へ出て行くかを知ることになる：

For it was just at that moment that Frankie understood. She knew who she was and how she was going into the world. Her squeezed heart suddenly opened and divided. Her heart divided like two wings. And when she spoke her voice was sure. “I know where I’m going,” she said. (p. 56)

自信のこもった声で、Frankie は、John Henry に向かって、次のように続けて言う：“I’m going to Winter Hill...I’m going to the wedding...I’m going with them. After the wedding at Winter Hill, I’m going off with the two of them to whatever place that they will ever go. I’m going with them.” (p. 56) これに対して John Henry が何も答えないと、彼女はさらに続けて言う：“I love the two of them so much. We’ll go to every place together. It’s like I’ve known it all my life. that I belong to be with them. I love the two of them so much.” (p. 57)

この後、これまでになく美しく見える夜空を見つめながら立っている Frankie の心の中で、自分も結婚式のメンバーなんだという思いが固まっていく。それを明確に表わしているのが、第1部の最後の一節である：

Frankie stood looking into the sky. For when the old question came to her—the who she was and what she would be in the world, and why she was standing there that minute—when the

old question came to her, she did not feel hurt and unanswered, At last she knew just who she was and understood where she was going. She loved her brother and the bride and she was a member of the wedding. The three of them would go into the world and they would always be together. And finally, after the scared spring and the crazy summer, she was no more afraid. (p. 57)

Frankie 自身が結婚式のメンバーとなり、兄と花嫁と Frankie の三人が結婚し、新しい生活を始めるつもりになっているのである。常識では考えられない空想であるが、Frankie がこのような空想を抱くことになる背景には、まだ子供である彼女が、結婚に伴う男女の性的な関係を理解していないという状況があると考えられる。それは、クラブのメンバーになっている年上の女の子たちのことで、彼女が、“The son-of-a-bitches....And there was something else. They were talking nasty lies about married people. When I think of Aunt Pet and Uncle Ustace. And my own father! The nasty lies! I don't know what kind of fool they take me for.” (p. 18) と言っていることや、自宅の下宿人の Marlowe 夫妻の部屋のドアがあいていて、夫妻が性的関係を持っている場面を見て驚き、“Mr. Marlowe is having a fit.” (p. 50) と叫びながら、台所へかけこむことなどに表われている。愛しているものが固く結びつき、共に生活をしていくのが結婚であると、Frankie は考えているのであり、それだからこそ、兄と花嫁を愛している自分が二人と結婚して、一緒に世の中へ出て行こうと思うと言える。Frankie が兄と花嫁と自分の三人で作りたいと思っている関係が、性的なものとはかけ離れたものである点は、Margaret B. McDowell も指摘している⁴。また、世の中へ出て行くにも一人ではどうしたらよいかわからず悩んでいた Frankie にとって、兄と花嫁と一緒に世の中へ出て行くのは、最も安全に世の中へ出て行く方法である。このような理由から、彼女は、自分自身が結婚式のメンバーになり、兄と花嫁と結婚するという、空想の世界を作り上げることになるのである。この点から見て、Barbara A. White の、“Frankie's principal 'flightfrom reality' is her creation of a fantasy world.”⁵ との指摘は的を得ていると言えるし、第1部全体を見るならば、Richard Crook が、“*The Member of the Wedding* is a novel about the loneliness, the uncertainties of identity, and the plain foolishness, associated with adolescence.”⁶ と述べている通りであると言わざるを得ない。

III

第2部では、Frankie は、たとえ自分の作り上げた空想の世界においてではあっても、第1部で属すべき「わたしたち」を見つけ出し、自分が誰なのかわかったため、心は安定したものとなる。ここでは彼女の名前は Frankie ではなく、F. Jasmine となっている。この理由は、兄 Jarvis と花嫁 Janice のどちらの名前も Ja で始まることから、Frankie が、自分の名前もまた Ja で始まるものにしようと思い、F. Jasmine に変えてしまうからである。兄と花嫁がやって来て去って行ったのが金曜日で、第2部では、一夜明けた土曜日のことが描かれる。

明け方に目を覚ますと同時に、F. Jasmine は、まるで“her brother and the bride had, in the night, slept on the bottom of her heart” (p. 60) であるかのように、結婚式のことを思い出す。この朝の F. Jasmine には、以前の Frankie のようなとまどいはなく、“...already she felt familiar with the wedding for a long, long time.” (p. 60) とあるように、結婚式のこと、すでに彼女の心の奥底に定着しているのである。翌日の月曜日には町を出て行き、再び帰って来ることはないと思うと、F. Jasmine は、“...the town called to her and was now waiting.” (p. 60) であるような奇妙な気分になる。彼女は、一番大人っぽく見えて、一番上等な、ピンクのオーガンディー

のドレスを着て、口紅をぬり、香水をつけるといった具合に、非常に大人っぽい装いをして町へ出かける用意をする。家を出る前に、早起きしていた父親に話しかけ、“Papa, I think I ought to tell you now. I’m not coming back here after the wedding.” (p. 62) と言うが、父親は聞いていない。そこで彼女が、“I have to buy a wedding dress and some wedding shoes and a pair of pink, sheer stockings.” (p. 62) と言うと、父親はうなずく。町へ出かけようとする F. Jasmine には、様々な思い出が浮かんで来て、彼女は生まれてからこれまでの12年間を振り返ってみる。“Papa...I will write you letters.” (p. 63) と言う彼女には、残していく父親のことが気の毒に思われる。一緒に寝てもらえなくなってから抱いていた父親に対する怨みも、この時にはもう消えてしまっているのである。また、町を歩いている F. Jasmine の内面を描写した次のような箇所がある：

Now, as F. Jasmine crossed her yard, she saw in her mind’s eye the swarming children and heard from down the street their chanting cries—and this morning, for the first time in her life, she heard a sweetness in these sounds, and she was touched. And, strange to say, her own home yard which she had hated touched her a little too; she felt she had not seen it for a long time. (p. 64)

F. Jasmine の父親に対する怨みの気持が消えたり、彼女が見るもの、聞くものに美しさを感じたりするのは、兄と花嫁という仲間ができたために、孤独を感じなくなって心が安定し、これから結婚して世の中へ出て行くのだという喜びがわきあがっているからであろう。このような彼女の内面的変化は、彼女が町で荷馬車の黒人と出会って目と目が合った時、“...F. Jasmine felt between his eyes and her own eyes a new unnamable connexion, as though they were known to each other....” (p. 66) であったことにも表われている。これと同じようなことを、彼女は他の人たちに対しても感じる。兄と花嫁と一緒に世の中へ出て行くのだという喜びは、F. Jasmine に世の中を身近なものに感じさせるのであろう。これは、属すべき所がない孤独感にさいなまれていた以前の Frankie が、世の中と切り離されたように感じていたのと対照的である。

F. Jasmine は、喜びの気持から、自分のこれからの計画を人々に話して、結婚式のことを知ってもらいたくてたまらなくなる。それで、いろいろな人に結婚式のことを話しながら、町の中を歩き回るのであるが、“Under the fresh blue early sky the feeling as she walked along was one of newly risen lightness, power, entitlement.” (p. 66) とあるように、彼女は、浮き浮きした心と、力強い自信を抱いて歩いていく。途中で兵隊たちを見かけるが、F. Jasmine は、以前の Frankie のように、これからいろいろな国へ行くであろう兵隊たちに対して、嫉妬を感じたりすることはない。彼女の心は、結婚式のことや自分の計画を話したいという、ただ一つの思いでいっぱいなのである。最初、彼女はブルー・ムーンという酒場へ行き、その店の主人に話す。そして、話すうちに、彼女のこれからの計画は疑問の余地のないものだという、確信がわいてくるのである。

ブルー・ムーンの中で、F. Jasmine は、後に彼女と関わりを持つことになる、赤毛の兵隊を見かける。この時も、彼女は兵隊に対して嫉妬を感じないだけでなく、説明のつかない結びつきを感じる：

That morning, for the first time, F. Jasmine was not jealous....her eyes as she looked into the soldier’s eyes were clear of jealousy and want. Not only did she feel that unexplainable connexion she was to feel between herself and other total strangers of that day, there was another sense of recognition: it seemed to F. Jasmine they exchanged the special look of

friendly, free travellers who meet for a moment at some stop along the way. The look was long. And with the lifting of the jealous weight, F. Jasmine felt at peace. (pp. 71-72)

彼女と兵隊はじっと見つめ合うわけであるが、この時彼女が感じたものと、兵隊が感じたものにはずれがあり、この時点では、彼女はそれを理解していない。まだ子供である彼女が誤解したということが、後になってわかることになる。

そのままブルー・ムーンを出た F. Jasmine は、街の中を歩いて行くが、彼女が結婚式の話をするのは、“...she wanted only to be recognized for her true self.” (p. 73) や、“And of all these facts and feelings the strongest of all was the need to be known for her true self and recognized.” (p. 74) などからわかるように、本当の自分を知ってもらいたい、認めてもらいたいという欲求からと考えられる。表面的には、喜びの気持から話すとも言えるが、彼女の心の奥底では、本当の自分を知ってほしいという欲求が生まれ、思春期の F. Jasmine は自我に目覚めるのである。様々な人たちに結婚式のことを話すうちに、結婚式の計画は彼女の心の中でますます固まっていき、自分の本当の姿を認めてもらいたいという欲求も一応満たされ、彼女は父親の時計店に行く。この時、John Henry の大伯父に当たる Uncle Charles が亡くなったことを父親から聞くが、結婚式とは関係がないために、彼女はあまり悲しいとは感じない。

結婚式のための洋服を買いに行く途中で、F. Jasmine は、町を出る前に会いたいと思っていた猿回しと猿に出会う。その時猿回しと口論していたのが、前にブルー・ムーンで見かけた赤毛の兵隊である。この兵隊に誘われてブルー・ムーンまで行った F. Jasmine は、終始大人っぽく振る舞おうとし、兵隊がすすめるビールを飲むが、とてもおいしいとは感じられない。兵隊と一緒にブルー・ムーンで時間を過ごしている時の F. Jasmine は、心の中では、兄と花嫁と自分の三人のことを思い描き、世界を身近に感じており、彼女の世界観も以前の Frankie のそれとは違っている：

Today she did not see the world as loose and cracked and turning a thousand miles an hour, so that the spinning views of war and distant lands made her mind dizzy. The world had never been so close to her. Sitting across from the soldier at that booth in the Blue Moon, she suddenly saw the three of them—herself, her brother, and the bride—walking beneath a cold Alaskan sky.... (p. 85)

世界を身近に感じている F. Jasmine は、以前のように、世界がしまりがなくなるとか、ひび割れているとか、大変な速度で回っているとか思うことはないのである。

ブルー・ムーンで大人っぽく振る舞おうと背伸びをしている F. Jasmine は、兵隊が、“a peculiar expression, not as one traveller gazes at another, but as a person who shares a secret scheme.” (p. 86) で彼女を見つめ、“Who is a cute dish?” (p. 86) と言った時に、何のことだかわからず、兵隊の意図を理解することはない。そのため、兵隊から夜9時にデートしようと誘われると、兵隊が自分のことをもっと年上だと思っていることに気づきながらも、「デート」という、年上の女の子たちが使う大人の言葉に魅力を感じて、不安なままにデートする約束をしてしまう。

午後2時ごろに帰宅した F. Jasmine は、午後の間 Berenice と John Henry と三人で過ごすのだが、この午後の三人の会話の場面で、重要な役割を果たすのは、黒人の女中 Berenice である。F. Jasmine は、ブルー・ムーンでデートの約束をした兵隊のことを Berenice に話そうと思うが、結局話すことができず、その日の話は結婚式のことばかりになる。F. Jasmine のそれまでの様子から、彼女が兄と花嫁の結婚式に心を引きつけられていることに気づいている Berenice は、

奇妙な恋の例を話す中で、“I never before in all my days heard of anybody falling in love with a wedding. I have knew many peculiar things, but I never heard of that before.” (p. 98) と言い、さらに、F. Jasmine に対して、同じくらいの年頃の白人の男の子のボーイフレンドを見つけ、しとやかに振る舞うようにすることをすすめる。Lawrence Graver も、“Berenice’s clarity and bluntness serve as a genial check on Frankie’s foggy romanticism, and she spends a good deal of her time calling the girl back to the things of the real world.”⁷⁾ と言っているように、Berenice は、F. Jasmine を空想の世界から現実の世界へつれもどそうとするのである。

Berenice がボーイフレンドとして Barney はどうかと言うと、F. Jasmine は、“That mean nasty Barney!” (p. 99) と言って、ガレージでの出来事を思い出しかけるが、思い出さないようにする：“But she did not let herself remember the unknown sin that he had showed her, that later made her want to throw a knife between his eyes.” (p. 99) 後で Barney にナイフを投げつけたくなったほどの、ガレージでの Barney の罪が何であるのかは、詳しく描かれることはないが、後に抱きついてキスしようとした兵隊を水差しで殴りつけて逃げる時に、F. Jasmine がこの Barney のことを思い出すことから推測すると、Barney はガレージで、性的なことを彼女に話すか、するかしたのかもしれない。

遅い昼食の途中で、F. Jasmine が結婚式用に買って来た服を着て見せると、Berenice は、大人っぽいドレスで似合わないから店へ返すように言うが、それがバーゲンの品で返品できないことがわかると、何とか直せないかと考えてくれる。母親が死んでいないため、Berenice は、いつも F. Jasmine の母親のような役割を果たしているのである。Berenice は、自分の最初の夫の Ludie Freeman との出会いや、Ludie との結婚から彼の死まで、さらには、二番目、三番目の夫との出会いや別れのことなどを、恋するとはどういうことか、愛するとはどういうことかなど含めて、F. Jasmine に語って聞かせる。午後の会話の中で愛のことを話し合うのはこれが初めてで、F. Jasmine が仲間に入って語り合うのもこれが初めてである：

It was the first time ever they had talked about love, with F. Jasmine included in the conversation as a person who understood and had worth-while opinions. The old Frankie had laughed at love, maintained it was a big fake, and did not believe in it. (p. 118)

以前の Frankie が愛など信じていなかったのに対して、兄と花嫁を愛し、その二人との結婚を空想することにより、愛は F. Jasmine にとって身近な問題となったと言えるであろう。

夕暮れになって暗くなりかけると、F. Jasmine はそろそろ出かけなくてはならないと言い出す。だが、戸口に立ったものの彼女は立ち去ろうとせず、再び会話が始まっていく。F. Jasmine は、なぜ名前を変えることがいけないのか Berenice にたずね、Berenice は、“Because things accumulate around your name.” (p. 134) と言い始めて、名前にどんな意味があるのか説明する。F. Jasmine はいろいろなことを話す、それは本当に彼女が言いたいことではなく、何となくまとまりがない。そのうちに、彼女は早口でしゃべりだし、Winter Hill での結婚式の後で、兄と花嫁と自分の三人が世界中を回って、何千人もの友だちを作るのだと言う。この時も、Berenice は母親のような役割を果たす。Berenice は、興奮している F. Jasmine を自分の膝の上にすわらせて抱き、F. Jasmine は次第に落ち着いてくる。F. Jasmine を膝にのせたまま、Berenice は、人間というもの皆それぞれ別々の存在で孤立していることを話す：

“We all of us somehow caught. We born this way or that way and we don’t know why. But we caught anyhow. I born Berenice. You born Frankie. John Henry born John Henry. And maybe we wants to widen and bust free. But no matter what we do we still caught. Me is me

and you is you and he is he. We each one of us somehow caught all by ourself. Is that what you was trying to say?" (p. 141)

この後、Berenice は、自分が黒人であるが故に、さらに一層自由を奪われていると語る。このような Berenice の話を F. Jasmine が完全に理解するのは無理かもしれないが、Berenice は、F. Jasmine の空想の世界が崩れた時のことを考えて、前もって彼女に語り聞かせるのであろう。Ihab Hassan が、"Berenice is indeed the rock on which the novel rests....Without her, the tortured sensitivity of Frankie—a sensitivity, after all, which has no correlative but the wistfulness of puberty—would seem pointless and contrived."⁸とやっているように、主人公の心の成長過程において Berenice の存在は重要である。

その晩、F. Jasmine は、John Henry を伴って、Berenice の母親の Big Mama の所へ運勢を見てもらいに出かけて行き、青い目の金髪の男の子と結婚するだろうと言われる。その後、町へもどってから John Henry を家に帰らせて、兵隊とデートの約束をしたブルー・ムーンへ向かう。ブルー・ムーンへ着くと、兵隊は空席をさがして酒の入った飲み物をすすめる。二人の会話はかみ合わないが、それがなぜなのか、F. Jasmine には理解できない。まもなく、兵隊は二階の自分の部屋へ行こうと彼女を誘う。何か変なところがあると感じながら、二階の兵隊の部屋までついていき、その部屋に入った F. Jasmine は、異様な静けさに不安を感じる。兵隊が変な目つきで彼女の身体をじっと見つめると、彼女は恐ろしくなる。ついに兵隊が F. Jasmine に抱きついてキスしようとした時、彼女は兵隊の舌にかみつ、あたりにあった水差しで兵隊の頭を殴りつけ、昏倒させてしまう。この時、彼女は、Marlowe 氏の発作のことや、Barney とのいやな思い出などが心をよぎるが、ばらばらの思い出を一つにまとめて考えてみようとはしない。F. Jasmine は兵隊のことを気違いだと思っただけのみである。気違いという言葉を繰り返しながら走り続けて、自分の家のある町角までたどり着き、John Henry に会った時も、"I just now brained a crazy man." (p. 162) と彼女は言う。だが、すぐに、いま言ったことは忘れるように John Henry に言い、彼が誰にも話さないと約束した後、二人は家に帰るのである。父親と会話をかわし、John Henry と一緒にベッドに入って眠り込み、目をあけたらもう夜が明けている。

IV

第3部では、主人公の名前は、彼女の本来の名前である Frances になっている。ここでは、第2部で F. Jasmine が結婚式に対して抱いていた空想が崩れ去り、Frances は落胆して帰宅するが、世の中へ出て行こうという望みは捨てきれず、父親に置き手紙をして家出し、警官に保護される。物語の最後で描かれるのは、13才になり、新しい友だちもできて、精神的にも安定した Frances の様子である。

結婚式の当日である日曜日、スーツケースを持ってバスに乗り込んだ Frances は、バスが南へ南へと走っているのを感じて不安になる。彼女は Winter Hill という名前を聞いて北部にあると思い込んだために、バスの窓から見える景色がきわめて南部的であることが変だと思っただけである。結婚式そのものは、"The wedding was like a dream, for all that came about occurred in a world beyond her power....from the beginning to the end the wedding was unmanaged as a nightmare." (p. 168) とあるように、すべてが Frances の力の及ばない世界で行なわれる。結婚式の会場で、Frances は皆から子供としてしか扱ってもらえず、兄や花嫁と話すチャンスもない。花嫁の部屋の片隅に立って、Frances は "I love the two of you so much and you are the we of me. Please take me with you from the wedding, for we belong to be together." (p. 170) と言いた

くて仕方がないが、実際にはヴェールがどこにあるのかたずねるくらいしかできない。とても兄と花嫁につれて行ってもらえそうにないと考え、Francesはスーツケースを持って新婚旅行用の車に乗り込み、ハンドルにしがみつき、心の中では“You are the we of me.” (p. 172)と叫ぶのだが、実際に口に出して言えるのは、“Take me! Take me!” (p. 172)という言葉だけである。Francesは父親と他の人によって車から引きずりおろされ、兄と花嫁の車が走り去った後も、土ぼこりにまみれて、“Take me! Take me!” (p. 172)と叫び続ける。

夢がやぶれたFrancesは、第2部でF. Jasmineが町で出会う人々との間につながりを感じるのと対照的に、帰りのバスに乗り合わせた他人も含めてあらゆる人間に敵意を抱き、自分自身が一番憎らしいと思う。世界中の人間が死ねばいいと思うほど、精神的に落ち込んでしまう。バスの中では、BereniceやJohn Henryが何を言っても、Francesは泣くばかりである。家に帰ったFrancesは、結婚の仲間には入れてもらえなくても、やはり世の中へ出て行こうと思う：

They thought it was finished, but she would show them. The wedding had not included her, but she would still go into the world. Where she was going she did not know; however, she was leaving that night. If she could not go in the way she had planned, safe with her brother and the bride, she would go, anyway. (p. 175)

このように、とにかく世の中へ出て行こうと決めた時、Francesは水差しで頭を殴りつけた兵隊のことを思い出すが、この時はほんの少し思い出すだけである。

父親に置き手紙をし、スーツケースを持って家を出たFrancesは、町で見知らぬ二人づれを見て、兄と花嫁が迎えに来てくれたような気がするが、それが錯覚だとわかると、胸に穴がいたような、そして、胃が重苦しいような感じがする：“There was a hollow in her chest, but at the bottom of this emptiness a heavy weight pressed down and bruised her stomach, so that she felt sick.” (p. 180)この後、Francesはいろいろ考えているうちに、例の兵隊のことを思い出し、Big Mamaの占いで言われたことにも当てはまるので、兵隊に結婚してくれるように頼もうかと不意に思いつく。しかし、足を早めて歩いている時に、Marlowe氏の発作の事件と、兵隊と会ったブルー・ムーンの静けさ、ガレージの裏でのいやらしい会話のことなどが、彼女の心の暗闇の中で一緒になり、ぱっとひらめいて、彼女は理解する。それは彼女にとって“a feeling of cold surprise” (p. 181)であり、兵隊のことは彼女の心から追い散らされてしまう。おそらく、この時点で、Francesの頭の中では、結婚というものと男女間の性的関係が結びつくのであろう。それ故に、性的なものに嫌悪感を感じた思春期の少女Francesは、兵隊のことなど考えなくなるのである。ただ彼女が思うことは、一人で世の中へ出て行くのは恐ろしいので、誰か一緒に行ってくれる人を見つけなければならないということである。

Francesは町を去らず、ブルー・ムーンに一人でいるところを警官に保護される。これは、書き置きを見た父親が、Francesを探してほしいと警察に頼んだからである。F. Jasmineにとって世界が身近なものに感じられたのとは対照的に、この時のFrancesにとって、世界は遠いものに感じられる：

The world was now far away that Frances could no longer think of it. She did not see the earth as in the old days, cracked and loose and turning a thousand miles an hour: the earth was enormous and still and flat. Between herself and all the places there was a space like an enormous canyon she could not hope to bridge or cross....The world was too far away, and there was no way any more that she could be included. She was back to the fear of the summertime, the old feelings that the world was separate from herself.... (pp. 183-184)

兄と花嫁と一緒に世の中へ出て行くという夢が崩壊し、他に一緒に世の中へ出て行く相手も見つからず、再び家につれもどされることの決まった Frances にとって、世の中と自分をつなぐものは何もなく世の中はあまりにも遠く離れたものと感じられ、属す所のない孤独感にさいなまれていた夏の頃の精神的不安がよみがえるのである。

第3部の最後の部分に来て、場面は突然変わり、季節も変わった後の13才の Frances が描かれる。ここでは、John Henry は脳膜炎で死んでしまい、Berenice は T. T. という男性と結婚するかもしれないからというわけで、ひまを取りたいと言い、Frances と父親は Aunt Pet や Uncle Ustace と一緒に、郊外の新しい家に住むために引越すことになっている。場面は引越しの前日の Adams 家の台所で、夕方 Frances の新しい友だちの Mary Littlejohn がやって来て、夕食を共にし、翌日の引越しについて行く予定になっている。Mary Littlejohn が来るのを待ちながら、Frances と Berenice が話しているところである。この場面での Frances は “I am just mad about Michelangelo.” (p. 186) と言うような女の子になっており、Mary の将来の希望は偉い画家になることで、Frances の将来の希望は偉い詩人になるか、あるいは、レーダーの一流の権威になることである。Frances が16才、Mary が18才になったら、二人で世界中を回ることになっている。今ではお祭り広場で市が行なわれても、以前の Frankie のように奇形の見世物小屋へ行くことはない。ルクセンブルクにいる兄 Jarvis から手紙が来ると、“Luxembourg. Don't you think that's a lovely name!... We will most likely pass through Luxembourg when we go around the world together.” (pp. 189-190) と Berenice に語る Frances である。“I am simply mad about—” (p. 190) と言いかけた時、玄関のベルが鳴って静寂が破られ、彼女の胸には幸福感が突きあげてくる。Mary という同世代の友だちができて、共に世の中へ出て行く相手も決まった現在の状況に幸福を感じている Frances は、以前の孤独な Frankie と比べて大変な変わりようである。Richard Crook が述べているように、作者の McCullers はこの場面において、“that time changes identity and will continue to change it, maturity being a continuing process rather than any finally achieved state.”⁹であることを示しているのかもしれない。

V

これまで見てきたように、主人公である、子供でも大人でもない年頃の Frankie が、所属すべき所のない孤独感にさいなまれていた時に、兄と花嫁の結婚という出来事をきっかけに、自分も二人の結婚の仲間入りをして、共に世の中へ出て行こうという空想を心に描くのである。兄と花嫁という仲間ができたために、世の中を身近なものとして感じ始めるのであるが、彼女の常識はずれな夢は当然のように崩壊し、彼女は再び孤独な存在となり、世の中は前以上に遠いものと感じられる。しかし、13才になった主人公には新しい友だちもでき、数年後には一緒に世界を回る予定にもなっている。偉大な詩人か、レーダーの権威になるという夢もふくらんでいて、彼女の心も安定し、現在の状況に幸福を感じているのである。13才になった主人公が、以前のような現実離れした空想を描くことはなく、現実的な希望を持つようになった点から考えると、精神的に成長したとすることができる。だが、新しい友人もいつかは別れる時が来るかもしれないし、将来の夢も叶うとは限らないので、主人公が再び孤独感を味わう可能性もあるわけである。そう考えると、人間は常に夢と挫折を繰り返しながら生きていくものであるし、孤独な存在であるということもできる。やはり、この作品は、人間の精神的孤独を描いた作家 Carson McCullers の、きわめて優れた作品であると言わざるを得ないのである。

註

- 1 Lawrence Graver, *Carson McCullers* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), p. 41.
- 2 Carson McCullers, *The Member of the Wedding* (London: Penguin Books, 1987), p. 7. 以後、この作品からの引用はすべてこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内に、その頁を記す。
- 3 Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton: Princeton University Press, 1961), p. 219.
- 4 Margaret B. McDowell, *Carson McCullers* (Boston: Twayne Publishers, 1980), p. 89.
- 5 Barbara A. White. "Loss of Self in *The Member of the Wedding*," *Carson McCullers*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986), p. 134.
- 6 Richard Crook, *Carson McCullers* (New York: Frederick Ungar, 1975), p. 61.
- 7 Graver, p. 36.
- 8 Hassan, pp. 222-223.
- 9 Crook, pp. 76-77.